琉球大学学術リポジトリ

琉球諸島における《シマクサラシ儀礼》の定期化説の検証

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2015-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮平, 盛晃, Miyahira, Moriaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31154

『国際琉球沖縄論集』第４号
2015年３月

【研究論文】

琉球諸島における《シマクサラシ儀礼》の定期化説の検証

宮平　盛晃*

Verification Of Regularization Hypothesis Of The Shimakusarashi Ritual In The Ryukyu Islands

MIYAHIRA Moriaki*

要旨

琉球諸島に広く分布するシマクサラシ儀礼は、定まった実施月に定期的に行われるものと、疫病の流行を機に臨時に行われるものの2つに分けることができる。本稿は、先行研究で提示された、シマクサラシ儀礼は臨時のものが古く、後に定期化したという仮説の検証を試みるものである。

これまでに確認できた事例群の分布形態や内容の分析の結果、シマクサラシ儀礼は定期より臨時のものが古く、臨時からの定期化という変遷の形があったと考えられる。しかし、臨時とは別に定期的なシマクサラシ儀礼が新しく現れ、行われるようになっていったという可能性も明らかになった。

Abstract

The Shimakusarashi has been widely observed in the Ryukyu Islands. This ritualistic performance can be divided into two groups according to the timing of the delivery: periodically regularized and irregular ones. This study examines the hypothesis that previous research suggested that regularization of the Shimakusarashi had been developed after the series of deliveries of irregular rituals because they tended to be performed in the event of epidemic to terminate the plague with prayer.

According to the analyses of distribution and contents of the rituals in the region, the hypothesis is reasonably verified with certain process of the regularization of the ritual. However, it is also revealed that there certain possibility of emergence of the new types of periodic deliveries of Shimakusarashi rituals rather than being developed

*琉球大学大学院人文社会科学研究科博士課程後期。Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.

from irregular ones.

はじめに

琉球諸島の全域には、主にシマクサラシやカンカーと呼ばれる村落レベルの儀礼がある（以下、シマクサラシ儀礼で統一）。疫病の防除を目的とした儀礼で、動物の骨肉が村入口に設置される。災厄を村落の入口で防ぐという点で、本土の道切り儀礼に対応すると言えるが、動物を要する点で特徴的である。

これまでの調査で、シマクサラシ儀礼が琉球諸島において、類似する名称と内容の村落レベルの儀礼としては他に類を見ないほど、広域的かつ高い密度で分布し、その名称や期日などには大きなバリエーションと地域性がみられることが分かってきた［宮平 2012a,2013］。

シマクサラシ儀礼は、定まった実施月に定期的に行われるものと、疫病の流行を機に臨時に行われるものの2つに分けることができる。数的には定期的に行う事例が圧倒的に多い。

本稿は、臨時に行われるシマクサラシ儀礼に焦点を当て、先行研究で提示された、臨時なものが古く、後に定期化したという仮説の検証を試みるものである。このことは、仮説の実証的な検証が十分でない点や、定期と臨時の関係を考察した研究が少ない点からも意義あるものと考える。

本稿では、各地域の特徴の有無を確かめるため、琉球諸島を沖縄本島北部、中部、南部、その周辺離島、宮古諸島、八重山諸島の６つに分けて分析を進める。また、著者の聞取り調査によるデータには［聞取り］と付した。

１．研究史

シマクサラシ儀礼には定期的に行われるものの他に、疫病の蔓延時などに臨時に行われるものがあることが以前から報告されてきた［田代 1945 p46。リーブラ 1974 pp.198-199］。

定期と臨時のシマクサラシ儀礼の関係性を初めて言及したのが小野重朗である。小野は、沖縄のシマクサラシ儀礼を、本州のコト、南九州のトキ、奄美のカネサルやキトウなど、日本全国に広く分布する防災儀礼の一つとして捉えた［小野 1970 pp.32-34］。

さらに、小野は全国の防災儀礼の儀礼名称、目的、意識される災厄、防災方法、吊されるもの、期日などの構成要素の比較分析と、民俗周圏論の視点から、分布形態の分析を行った ［小野 1979 pp.20-27］。各構成要素の分析と考察は、シマクサラシ儀礼を研究する上で非常に重要なものである。要約すると、沖縄の防災儀礼は、単純で具体的な名称で（儀礼名称）、農耕儀礼の要素がみられず（目的）、疫病という具体的な災厄を意識し（意識される災厄）、餅ではなく肉

を吊す（防災方法、吊されるもの）という特徴を持ち、それは防災儀礼の古い形と考えられるとした。本稿の主旨ととくに関係のある臨時と定期の防災儀礼については、以下のように分析している。

全国の防災儀礼は、不定期（以下、臨時で統一）と定期に分けられ、臨時のものは、沖縄、奄美、南九州に多く、本州にはみられないという分布形態は、古い形は周縁に残るという民俗周圏論の視点から、定期より臨時の防災儀礼が古いことを示しているとした［小野 1979 p23］。熊本県の天草下島の防災儀礼であるコトを例に、臨時が多いなか、村落によっては定期的に行われるのは、本来は臨時であったコトが定期化する傾向を意味しているとした。村落によって臨時、あるいは定期のコトが行われる状態を経て、臨時のコトは消失し、定期化したものだけが残ったのが東日本のコト八日であると考察している［小野 1979 pp.4-5］。シマクサラシを含めた防災儀礼は、定期より臨時の方が古く、定期化していったと考え、防災儀礼の臨時からの定期化説を提示した。

琉球諸島の年中行事の概説や各地の民俗誌で、シマクサラシ儀礼は、村落によって定期あるいは臨時に行われるという報告はあるが、小野のように、定期と臨時という異なる実施間隔の関係を、根拠となる事例を示し考察した研究はない。

これまでに確認できたシマクサラシ儀礼の事例群を分析し、小野の提示した本儀礼の臨時から定期化説の具体的な検証を行いたい。

２．定期化と臨時化

2-1.　定期と臨時の新旧

シマクサラシ儀礼が臨時から定期化したという仮説は、臨時の儀礼が定期的なものより古い、という前提の上に成り立っている。しかし、ある地域の複数の民俗儀礼を発生や歴史の古い順に並べたり、その変遷を解明することは容易ではない。

小野重朗は、ある2つの民俗のどちらが古いか、その発生や展開、変遷過程などを考える場合、民俗学には決定的な判断基準がないとした上で、最も貴重な方法になるのが民俗周圏論（方言周圏論の拡大解釈）と考えられるとした［小野 1996 p17］。臨時と定期のシマクサラシ儀礼の分布形態から、その新旧を考察したい。

小野は、先の方法が使える民俗の適用条件として、分布が相当に広く、周圏的構造をもっていることを挙げた［小野 1996 p17］。シマクサラシ儀礼が周圏的構造を持っているのかは儀礼内容の更なる分析が要されるが、分布圏の広さは適用条件を満たしていると言える[宮平 2012b]。

まず、臨時事例の数は522例中37例と少ない。内訳は、沖縄本島北部10例、中

部9、周辺離島15、八重山諸島３例となっている。臨時事例は、琉球諸島全域に均等に散在しているのではなく、沖縄本島の周辺離島に顕著で、本島南部や宮古にはみられない。

周辺離島の事例数は臨時全体の４割（35例中15例）を占めている。さらに、周辺離島でシマクサラシ儀礼が確認できたのは24村落で、その過半数が臨時の事例であることからも、非常に高い密度で臨時事例が集中していることが分かる。

また、周辺離島以外の沖縄本島の臨時事例を細見すると、現在は架橋により陸続きとなっているが、近代あるいは最近まで、本島とは海を挟んだ離島であった村落が5例あることが分かった（今帰仁村古宇利、旧与那城町宮城、伊計、桃原、旧勝連町比嘉）。これらを離島として含めると、沖縄諸島では、34例の臨時事例のうち、約6割に相当する19例が、沖縄本島とは海を隔てた離島の村落である。

なぜ、離島に臨時の事例が多いのだろうか。離島だけで臨時事例が受容された、あるいは、臨時事例が離島だけに残存したかのどちらかだと思われるが、後者ではないだろうか。

あと、かつて離島であった村落を除いた沖縄本島内の臨時事例を市町村ごとにみると、ほとんどが一市町村に1～2村落ほどである（大宜味村１、名護市１、今帰仁村１、本部町２、金武町１、旧石川市１、西原町１、宜野湾市２、浦添市１）。その中で最多の市町村は、本島最北端の国頭村であった（国頭村与那、奥、安田）。

小野重朗は、全国の防災儀礼の分布形態について、東日本側は陸続きで、伝わる速度も早い上に、古い民俗を保持することが少なく、新しい影響を受けやすいのに対し、西日本側は島から島へと続いていて、島ごとに古俗を保持する傾向が強いと考えられるという。そして、〈陸の周圏〉と〈島の周圏〉には違いがあり、陸と島とが中心から同じ距離の時には陸側は近く、島側は遠い時代の防災儀礼を残し留めているとした［小野 1979 pp.20-22］。

このことを踏まえると、臨時事例が沖縄本島の離島に集中し、本島内でも最北端の国頭村に多いという臨時事例の分布形態は、臨時のシマクサラシ儀礼が定期的なものより古いことを示していると考えられる。古俗が周縁に残存した結果の分布形態と言えるのではないか。

ただし、中央から遠い周縁に臨時が残るのなら、先島諸島にも多いことになると思うが、宮古諸島に皆無で、八重山諸島にもそれほど多くない意味も、今後解明すべき点である。

以上、臨時事例の分布形態から、定期より臨時の方が古いと考えられることが分かった。ここで初めて、「臨時からの定期化説」が成り立つための条件が満たされたと言えよう。

2-2.　定期化

「臨時からの定期化説」を示す、かつて臨時であったシマクサラシ儀礼が定期化したという実例は2村落と非常に少ない（今帰仁村崎山、竹富町小浜）。崎山は、疫病の流行時に行っていたものが、12月24日に定期化したという（本稿で扱う期日はすべて旧暦）［崎山誌編集委員会 1989 pp.104-105］。小浜では、疫病の蔓延を防ぐために臨時に行われていた儀礼が、2月と10月の年2回になったといわれる［山城編 1972 p99］。両例とも、定期化した時代は不明で、崎山と小浜での聞取り調査を行ったが、シマクサラシ儀礼が臨時から定期化したという話や年代を知る方に会うことはできなかった。

小野の提示した「臨時からの定期化説」を示す希少な実例であるものの、2例だけをもって、ほとんどの定期事例がかつては臨時であったと捉えることはできないであろう。他の事例から、さらに考察を加えたい。

事例群の中に、儀礼は基本的には特定の月に行ったが、疫病の蔓延の際は同じ儀礼を臨時にも行ったという村落がある（今帰仁村古宇利、旧勝連町比嘉、竹富町祖納）。毎年、古宇利は４月と９月[宮城 1994 pp.19-20]、比嘉は２月と12月[聞取り]、祖納は10月に疫病の防除を目的に儀礼が行われたが、臨時にも実施したという[琉球大学民俗研究クラブ 1969 p46]。

定期ではあるが、臨時の要素を強く持っている例として国頭村宇良の事例がある。毎年4月にシマクサラシ儀礼を実施することから定期的な事例に含めたが、月と同じく、季節の変化を意味するとされるホトトギスの鳴き声を重要な基準としている。臨時の要素を強く持つ定期事例と言えよう。

宇良のように、儀礼の時期を、疫病の蔓延しやすい季節の変わり目と意識している村落がある（33例）。内訳は、沖縄本島北部10、中部６、南部３、宮古２、八重山11と、沖縄諸島では北部に多く、先島諸島では八重山に多かった。月別に分けると2～6月、8～12月と、ほぼ年中にまたがってそのような認識がみられた。

疫病の流行の状況をみて、内容を盛大または簡素にしたという事例もある。金武町伊芸では、カンカーは毎年11月頃の定期的なものであったが、疫病の猖獗した年はより盛大に行ったといわれる[聞取り]。石垣市宮良では、年2回の儀礼の実施時期は、疫病の流行る季節の変わり目であったという。また、流行しない年は簡素に、年1回になることもあったという[1]。

これらの事例は、定期の事例にみられる臨時要素であり、儀礼が臨時から定期化した後の名残とも考えられよう。

浜田泰子は、シマクサラシ儀礼は自然が猛威をふるい、疫病がはやりはじめる時期、つまり季節の変わり目を意識して行われるとした[浜田 1992 p227-228]。事例群（33例）は、その指摘の例証であると同時に、臨時からの定期化説の傍証と言えよう。さらには、臨時が定期化する時期は、疫病の蔓延する季節の変

わり目であったことを示唆し、定期化する期日を考える上で重要な事例群と思われる。

最後に、実施月の定まっている定期のシマクサラシ儀礼は、全体の9割を占めている（522例中478例）。その点で本儀礼は年中行事と言えるが、地域や村落によってほぼ全ての月に儀礼がみられるというバリエーションの多さは、琉球諸島における他の村落レベルの年中行事には類をみない特質である。その特質自体が、シマクサラシ儀礼が臨時要素の大きな儀礼であることを物語っているとも考えられる。

2-3.　臨時化

事例群の中には、「臨時から定期化」ではなく、「定期から臨時化」した事例がある。沖縄本島北部の今帰仁村謝名と中部の浦添市牧港の2例と少ないが、その意味を考察したい。

臨時化した年代については、謝名の話者（大正５年生）が儀礼を実見したのは15歳頃（昭和5年頃）で、それを最後に儀礼は行われていないという［聞取り］。話者は、「以前まで毎年であった儀礼を臨時にしたために、このようなこと（ある村人の病気）が起こった」という先輩方の話を聞いたということから、定期から臨時化したことが分かる[2]。「以前」とは、当時の大人たちが記憶している年代であったということから、おそらく大正頃までは毎年行われていたと推測される。牧港では、大正時代まで毎年2月に行っていた儀礼が、昭和に入ってから臨時となり、昭和15年頃に途絶えたという［牧港字誌編集委員会 1995 p80］。

両例とも、大正から昭和の初め頃に定期から臨時化し、その後程なくして途絶えている。謝名では、臨時化してから数十年ぶりの実施であったが、その契機となったのは、ある村人が病気になったためで、それがなければ実施されることはなかったと思われる。限りなく途絶に近い、定期からの臨時化であったと考えられる。

まとめると、両例が臨時化して後に途絶えている点や、謝名の事例から、「定期からの臨時化」は、村人の儀礼への関心や重要性の低下によるものと考えられ、儀礼の大きな形骸化、また途絶の前段階の状態と言えるのではないか。このことから推察すると、臨時の儀礼が毎年の儀礼になるという「臨時からの定期化」は、人々にとっての儀礼に対する関心と重要性の高まりと換言できると思われる。

３．併存する定期と臨時のシマクサラシ儀礼

小野重朗の提唱したシマクサラシ儀礼の「臨時からの定期化説」は、臨時に実施される儀礼が定期化したというものである。その仮説の前提となる、臨時

の方が定期よりも古いと考えられることが分かり、限られた数だが臨時から定期化した実例（2例）も確認できた。

著者自身も、その仮説の裏付けとなる確証や傍証が調査によりみつかることを予想していたが、これまでの調査と今回の分析で、定期と臨時のシマクサラシ儀礼の関係に新たな側面が見えてきた。

結論から言うと、定期と臨時のシマクサラシ儀礼は、期日の変化した同じ儀礼ではなく、臨時とは別に定期的なシマクサラシ儀礼が新しく現れ、行われるようになっていった可能性が明らかになった。そのことを示す事例群を分析し、著者の見解を述べたい。

シマクサラシ儀礼を行う村落の中には、定期と臨時のシマクサラシ儀礼が併存する村落がある。両儀礼は期日が異なるだけで、内容は同じという事例があることは先に述べた（3例）。

それ以外に、併存する定期と臨時の儀礼が、期日の変化した同じ儀礼ではないと考えられる事例がある。確認できた8村落の儀礼内容を分析し、両儀礼の相違点と共通点を整理したのが表１である（大宜味村根路銘［聞取り］、旧石川市山城［山城 2006 下巻p32、中巻pp. 458-460, 462-464, 624］、旧与那城町桃原［沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ 2004 p161］、伊計［琉球大学民俗研究クラブ 1962 pp. 37-38］、宮城［聞取り］、浦添市牧港［牧港字誌字誌編集委員会編 1995 pp. 80-82］、旧玉城村屋嘉部［聞取り］、座間味村慶留間［聞取り］）。

村落名	期日	相違点	共通点
大宜味村根路銘	５月、８月、12月	名称、災厄の種類、防除方法（村落レベル）、防除空間の位置と数、吊るすもの、意識	祭司
	臨時		
旧石川市山城	12月	名称、防除方法（村落レベル）、防除空間の位置と数、意識	災厄の種類
	臨時		
旧与那城町桃原	８月	名称、屠られる動物、意識	災厄の種類、防除方法（村落レベル）、吊るすもの
	臨時		
旧与那城町伊計	３月、８月、９月、12月	災厄の種類、防除方法（村落レベル）、防除空間の位置と数、拝所、意識	祭司、屠られる動物、吊るすもの
	臨時		
旧与那城町宮城	３月、８月、12月	名称、災厄の種類、屠られる動物、防除方法（村落レベル）、防除空間の位置と数、吊るすもの、意識	祭司
	臨時		
浦添市牧港	２月	名称、共食場、意識	祭司、屠られる動物、共食方法
	８月（臨時）		
旧玉城村屋嘉部	８月頃	名称、防除方法（村落レベル）、吊るすもの、共食方法、食べる人、意識	祭司、防除空間の位置と数
	臨時		
座間味村慶留間	11月	名称、災厄の種類、祭司、屠られる動物、防除方法（村レベル、家レベル）、防除空間の位置と数、共食方法・分配方法、意識	屠場、共食場・分配場、食べる人
	臨時		

表１．併存する臨時と定期の相違点と共通点

表をみると、明らかに共通点より相違点が多い。事例数の多い、意識（８例）、名称（7例）、村落レベルの防除方法（6例）、防除空間の位置と数（5例）という相違点を具体的に挙げていきたい。

意識についてだが、ここで言う意識とは、聞取り調査や文献資料で確認できた、併存する定期と臨時の２つのシマクサラシ儀礼に対する人々の認識である。人々が、定期と臨時という実施間隔の異なるシマクサラシ儀礼を、同じ儀礼あるいは異なる儀礼のどちらと考えられているか、ということを分析した部分で

ある。異なる儀礼と考えている場合は相違点に意識と記したが、表１の全村落で両儀礼は異なる儀礼と考えられている。

名称の相違点は、以下のようになっている。前者は定期、後者は臨時の名称で、ハンカ・フーキゲーシ（根路銘）、カンカー・フーチゲーシ(山城)、シマクサラー・フーチゲーシ(桃原)、シマクサラシ・フーチゲーシ(宮城)、カンナー・お願ぶ解き(牧港)、フーチゲーシ・シマクサラサー(屋嘉部)、シマクサラサー・ハナシキヌウグヮン(慶留間)である。詳細な分析は「４　儀礼名称にみる儀礼の新旧」で行うが、定期はシマクサラシ系やカンカー系、臨時はフーチゲーシといった目的名称系で言い分けられていることが多い。

村落レベルの防除方法における相違点は、以下の通りである。浜辺に豚肉を供える・路上に縄を張りススキを吊る(根路銘)、路上に牛の血をぬった縄を張り牛の骨を吊るす・路上に縄を張る(山城)、浜辺に豚の頭を供える・ 疫病の神を清潔な家でもてなし、浜辺に豚の頭を供える(伊計)、路上に縄を張り山羊の肉を吊る・路上に縄を張り豚の骨を吊る(宮城)、路上で餅を投げる・路上で豚の血をサンにつけて撒く（屋嘉部)、豚の血をつけた木枝を浜辺に立てる・浜辺に山羊料理を供える(慶留間)。宮城と慶留間では使う動物も異なる。

防除空間の位置と数の相違点は、１カ所の浜辺・２カ所の路上(根路銘)、１カ所の路上・３カ所の路上(山城)、３カ所の浜辺・１カ所の浜辺（伊計)、１カ所の路上・３カ所の路上(宮城)、３カ所の浜辺・２カ所の浜辺（慶留間)となっている。山城、伊計、宮城、慶留間では場所によっては重複するが、その数が異なっている。

共通点に多いのは祭司（5例）で、女性神役（根路銘、伊計、宮城)と男性役員(牧港、屋嘉部)に分けられる。

防除の対象となる災厄の種類は、相違点４例、共通点２例であった。相違点としては、臨時ではフーチ（疫病）だけが意識されているのに対し、定期では、疫病に加え、ヤナムンやアクフウといった抽象的な災厄が対象とされている（根路銘、伊計、宮城、慶留間）。共通点の２例は、定期と臨時が、ともに疫病だけを防除の対象としている（山城、桃原）。小野重朗は定期的な防災儀礼には死霊といった抽象的な災厄が意識されるようになるとしたが、その傍証と言えよう。［小野 1979 pp.24-25]

以上、定期と臨時のシマクサラシ儀礼が併存していること、その過半数（8村落中6村落）で両儀礼の共通点より相違点の方が圧倒的に多いことから、表１の８村落における定期のシマクサラシ儀礼は、臨時から変化したのではなく、臨時とは別に現れ、行われるようになったと考えられる。

もし、ある１つの儀礼が臨時から定期化したのなら、両者を併行する必要性は無くなる。または非常に低くなると思われる。併存したとしても、前掲した実例（今帰仁村古宇利、旧勝連町比嘉、竹富町祖納の計3例）のように、異なる

のは実施間隔だけで、内容は同じものとなるであろう。実施間隔だけが異なる同じ儀礼であれば、表１のように相違点が多くなることはないと考えられる。定期化して後、臨時の儀礼と併存しながら、その名称や防除方法、屠られる動物、そして人々の意識までもが大きく変わるとは考えにくいのではないか。

表１のように、定期と臨時の儀礼が併存し、相違点が多い上に、人々も異なる儀礼と考えている場合、それは実施間隔だけが異なる同じ儀礼ではなく、別々に行われていた儀礼であった可能性が考えられる。

小野重朗も、定期と臨時という実施間隔の異なる、内容の類する臨時と定期の防災儀礼が同じ村落に併存することを把握していたようである。加計呂麻島須子茂の臨時のキトウと定期のカネサルを報告している。両儀礼とも疫病の防除を目的としており、村落入口に同じ木枝を挟んだ縄を張るというが、カネサルでは豚を屠り、その足や爪を吊したという。つまり、定期と臨時の儀礼の間に、名称、防除方法、動物（使用の有無）などの相違がみられる。小野は、同じ村落に臨時と定期の防災儀礼が併存する意味ついては言及せず、「よく似た行事」とするに留まっている［小野 1982 p76］。

４．儀礼名称にみる儀礼の新旧

定期と臨時のシマクサラシ儀礼の新旧の問題に、儀礼名称の側面からアプローチしたい。　臨時の事例群のうち、名称が確認できたのは29例ある。その大半の17例がフーチゲーシ（疫病返し）といった目的名称系で、シマクサラシやカンカーという儀礼を代表する名称は全体の約3割の9例にとどまる（重複3例含む）。

次に、表１で扱った、定期と臨時の儀礼が併存する8例のうち7例で、両儀礼の名称が確認できた。うち6例が定期的な儀礼をシマクサラシ系やカンカー系など、臨時をフーチゲーシやその他の名称などで呼び分けていることが分かった（根路銘、山城、桃原、宮城、牧港、慶留間）。

臨時事例の過半数（29例中17例）において儀礼はシマクサラシやカンカーではなくフーチゲーシ（目的名称系）と呼ばれ、定期と臨時が併存する事例の過半数（8例中7例）でも、定期はシマクサラシ系やカンカー系、臨時はフーチゲーシなどの名称で呼び分けられていたことになる。

以上から、シマクサラシやカンカーと呼ばれる儀礼は当初から定期的なものとして、フーチゲーシなどと呼ばれる臨時の儀礼とは別に存在した可能性が明らかになった。

ただ、70年ほど前に途絶え、その内容を明らかにすることはなかったものの、定期を目的名称系（フーチゲーシ）、臨時をシマクサラシ系と呼んでいたという反証も1例ある（旧玉城村屋嘉部）。本例も含め、定期と臨時のシマクサラシ

儀礼の問題を考察していきたい。

総括と課題

臨時に行われるシマクサラシ儀礼に焦点を当て、臨時なものが古く、後に定期化したという仮説の検証を試みてきた。要点と課題をまとめたい。

- **定期と臨時の新旧**　臨時事例の分布形態の分析から、シマクサラシ儀礼は定期より臨時の方が古いと考えられることが分かった。「臨時からの定期化説」の前提となる結果である。しかし、古いと考えられる臨時事例が、中央から離れた先島諸島に少ない理由は現時点では説明できず、今後の課題としたい。
- **定期化**　これまでの調査で確認できた、かつて臨時であった儀礼が定期化したという「臨時からの定期化説」の実例は2村落と少ない。しかし、定期の事例群の中には、臨時的要素を強く持つ事例があることが分かった。また、本儀礼の実施月のバリエーションの多さ（1,7月以外の全月にみられる）は、シマクサラシ儀礼以外の村落レベルの年中行事に類がなく、それは本儀礼の実施基準そのものに大きな柔軟性があることと、臨時要素が大きいことを意味していると言える。以上の事例から、小野の指摘通り、シマクサラシ儀礼の臨時からの定期化という変遷の形があったと考えられる。
- **併存する定期と臨時のシマクサラシ儀礼**　今回の分析で、定期のシマクサラシ儀礼は臨時から定期化したのではなく、臨時とは別に定期的なシマクサラシ儀礼が新しく現れ、行われるようになっていった可能性が明らかになった。

  柳田国男は、社における疫病を防除対象とした定期と臨時の祭りについて、根拠は示していないが、両儀礼は変遷したものではなく、別々に発生したものであるとした［柳田 1990 p406］。定期の方が臨時より古いという点は著者の見解と異なるが、定期と臨時の疫病を防除対象とした儀礼は変遷した関係ではなく、それぞれ別々に存在したという点では同じ見解と言える。

  沖縄諸島の周辺離島に多くの臨時事例がみられるのは、新規に発生した定期儀礼によって臨時の儀礼は淘汰されていき、残存した結果であると考えられる。このことから考えると、定期のシマクサラシ儀礼は沖縄本島で発生したと思われるが、その発生地の詳細は今後の課題としたい。

  今回の分析結果は、小野重朗の示した「臨時から定期化説」を否定するものではない。数は少ないが、臨時から定期化した実例（2例）や、それを示唆する事例があることは確かであり、伝承の残らないほど古くに臨時から定期化した可能性も十分に考えられる。それとは別の可能性が今回の分析で明らかになったと言える。

・ **儀礼名称にみる定期・臨時の新旧**　臨時事例の儀礼名称の分析の結果、シマクサラシ・カンカーと呼ばれる儀礼は定期的な儀礼として、フーチゲーシなどと呼ばれる臨時の儀礼とは別に存在したと考えられることが分かった。儀礼名称の分析からも、定期のシマクサラシ儀礼が臨時から定期化したものではなく、新しく現れたものである可能性が浮かび上がってきた。

これまで、臨時と定期のシマクサラシ儀礼は、内容の類似性から、実施間隔が変化しただけの同じ儀礼として把握されてきた。しかし、琉球諸島には、フーチゲーシ系(臨時)、シマクサラシ系(定期)、カンカー系(定期)などといった、村落レベルの疫病の防除を目的とした動物を要する複数種の儀礼が存在した可能性が明らかになった。各儀礼が、名称が変化しただけの同じ儀礼ではないことを証明する詳細な分析は稿を別けたい。

最後に、備考及び今後の課題として虫送りの事例を挙げておきたい。

琉球諸島には広く、田畑の害虫を海に流し、害虫駆除を祈願する虫送りがある。沖縄諸島ではアブシバレーやムシバレー、先島諸島ではムヌンと呼ばれる［沖縄大百科事典刊行事務局編　下巻　1983 p633］。

村落から災厄を防除する点では、シマクサラシ儀礼と同じく防除儀礼と言え、同じく定期と臨時がある。しかし、異なる実施間隔の意味や変遷の問題を考察した研究は、シマクサラシ儀礼と同様にみられない。

ただ、沖縄諸島のアブシバレーとムシバレーについては、「ムシバレーとアブシバレーが同一内容の行事となっている地域が多いが、民俗としてはムシバレーが古いと思われる」［沖縄大百科事典刊行事務局編　下巻　1983 p633］、また、両儀礼が併存する事例から、アブシバレーとムシバレーを混同した村が多いといった指摘がある［崎原　1975 pp.49-50］。定期と臨時の虫送り儀礼は、実施間隔が変化しただけの同じ儀礼ではないと換言できよう。本稿で示した、シマクサラシ儀礼の臨時と定期の関係と同様である。

高嶺亨は、〈アブシバレー〉儀礼の性格と、その複合性を琉球諸島全域での悉皆調査から明らかにした［高嶺　2008］。その期日の分析の中で〈アブシバレー〉儀礼の臨時事例を取り上げている。そこで定期と臨時の関係や変遷の問題については言及していないが、地域別に事例群を整理している。

それによると、〈アブシバレー〉儀礼の臨時事例の分布は、沖縄本島に限られ、周辺離島には1例も確認されていないという。沖縄本島での分布形態も、周縁に残っているとは言えず(北部5、中部16、南部1)、先島諸島にもみられない［高嶺　2008 pp.30-35］。

臨時のシマクサラシ儀礼は、周辺離島(沖縄諸島)に集中していることから、定期の儀礼より古いと考えられると結論づけたが、それと同じ現象は〈アブシ

バレー〉儀礼の臨時事例にはみられないようである。この点は、定期より臨時の防除儀礼が古いということを考える上で解明すべき問題である。

それから、定期と臨時が併存する村落では、定期事例はアブシバレー、臨時事例はムシバレー・ムシアシビと呼ばれている［高嶺 2008 p32］。また、臨時ではないが、アブシバレーより先に行われるムシバレーやムシアシビと呼ばれる事例も散見される。沖縄大百科事典や崎原の指摘、そして、小野の提示した民俗行事の順序は当民俗の歴史的変遷過程や新旧を表しているという「民俗変遷の仮説」と合わせて考えると興味深い［小野 1996 pp.17-22］。つまり、シマクサラシ儀礼にみる定期と臨時の儀礼と同じように、定期的な虫送り（アブシバレー）は臨時の虫送り（ムシバレー・ムシアシビ）が定期化したのではなく、臨時の方が古く、後に内容を同じくした定期的な儀礼（アブシバレー）が新規に発生したのではないか。アブシバレーの直前に行われるムシバレーやムシアシビは、定期的なアブシバレーを意識し、その直前に臨時から定期化したと推察される。今後、定期と臨時の儀礼内容の相違について詳細な分析が必要と考えられる。

【注記】

1) 宮良の儀礼の実施月は、文献によって12月［櫻井 2000 p142］または臨時［稲福 1995 p39］とされ、聞き取り調査でも、話者によって、9月や10月、年に1回や数回と一定していなかった［聞取り］。琉球大学民俗研究クラブの調査でも、「期日については10月とも、11月、1月ともいわれ明らかでない」と報告されている［琉球大学民俗研究クラブ 1977 p72］。これは儀礼の期日の柔軟性が大きく、限りなく臨時に近い定期的な儀礼であったとも推測できる。

2) 復活した実施月は話者によって、5,6月または8月と一定しないため、不明確としておくが暑い時期であったという証言は一致していた。

調査にあたり多くの方々に御教示を賜りました。心から敬意と感謝を表したいと思います。誠にありがとうございます。

【参考文献】

稲福盛輝(1995)『沖縄疾病史』第一書房、東京。
沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ(2004)『みんぞく』第 16 号、沖縄。
沖縄大百科事典刊行事務局 (1983)『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、沖縄。
小野重朗(1970)「肉と餅との連続－供犠儀礼について－」『日本民俗学』第 71 号、日本民俗学会、pp.29-41、東京。
小野重朗(1979)「コトとその周圏」『日本民俗学』第120号、日本民俗学会、pp.1-27、東京。
小野重朗(1982)「加計呂麻島の神祭り」『奄美民俗文化の研究』法政大学出版局、pp.28-79、

東京。
小野重朗(1996)「民俗研究の方法」『増補農耕儀礼の研究』第一書房、pp.3-22、東京。
崎原恒新(1975)「沖縄県の歳時習俗」崎原恒新、山下欣一共著『沖縄・奄美の歳時習俗』明玄書房、pp.11-141、東京。
崎山誌編集委員会(1989)『崎山誌』、沖縄。
櫻井徳太郎(2000)「八重山における近代化と民俗宗教の変容」『沖縄八重山の研究』法政大学沖縄文化研究所、pp.133-147、東京。
高嶺亨(2008)『沖縄におけるアブシバレー儀礼の研究』沖縄国際大学大学院（修士論文）、沖縄。
田代安定(1945)『沖縄結縄考』至言社、東京。
宮城真治(1994)「神の島、古宇利」『なきじん研究』4、今帰仁村歴史文化センター準備室編、沖縄。
宮平盛晃(2012a)「除厄儀礼としてのシマクサラシ」原田信男・前城直子・宮平盛晃共著『捧げられる生命－沖縄の動物供犠－』お茶の水書房、pp.21-58、東京。
宮平盛晃(2012b)「シマクサラシの分布と現況」原田信男・前城直子・宮平盛晃共著『捧げられる生命－沖縄の動物供犠－』お茶の水書房、pp.59-95、東京。
宮平盛晃(2013)「琉球諸島における動物・防除儀礼《シマクサラシ儀礼》の名称に関する研究-悉皆調査による新たな展開と問題-」『日本民俗学』第276号、日本民俗学会、pp.31-51、東京。
柳田国男(1990)「日本の祭」『柳田國男全集』第13巻、筑摩書房、pp.211-430、東京。
山下欣一(1969)「南島における動物供犠―心覚えとして―」『南島研究』第10号、南島研究会、pp.67-74、東京。
山城浩編 (1972)『小浜島誌』小浜島郷友会、沖縄。
山城正夫(2006)『シマの民俗－石川市山城－』コロニー印刷、沖縄。
琉球大学民俗研究クラブ(1962)『沖縄民俗』第 5 号、沖縄。
琉球大学民俗研究クラブ(1969)『沖縄民俗』第 16 号、沖縄。
琉球大学民俗研究クラブ(1977)『沖縄民俗』第23号、沖縄。
W.P.リーブラ（崎原貢，崎原正子訳）(1974)『沖縄の宗教と社会構造』弘文堂、東京。